
【ヘタリア】追憶のヘタリア

徘徊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【ヘタリア】追憶のヘタリア

【Nコード】

N0699Z

【作者名】

徘徊

【あらすじ】

黒い星に願い事をする、願いが叶う
という言い伝えを聞いた。

国が消えて、世界が壊れていく。

失われて、現れて。

国等はこの無限のループから抜け出し、悲劇のゲームから抜け出せるか。

地球を巻き込んだ悲しみと希望と悲劇と絆の二次創作。

プロローグ

昔のはなし。

全てが闇に包まれて
永遠の夢を悲しむ
道なき道は道ではなく

なんだっけ。

？

「獣道だろ？」

横に居たロマーノが口を挟んだ。

「え、そうなの？」

イタリアは手に持っていた本を閉じて置いた。

その本の名前、《三日月道》

道はなんだ、とか、道につながる、

夢、だとか、嘘、だとか、

いろいろ書かれているが、

とりあえずは絵本に入る、不思議な本。

イタリアはまた開き、読み始めた。

言い伝えに残るは
紅い華と蒼い華
両方開けば道になる
道にならないことなれば
運命今に開かずや
黙も闇も溶け込むだろう
戻ることままならず
猛き者終に及び
新しく世界は終わる
新しき世界は始まる

それもまた

「運命、かあ」
ヴエ、ヴエ、と鳴いた。

「なんか怖い本だな、それ。こんなものスペイン持ってたのか？」
ロマーノは、本を覗き見た。
挿絵は、黒い宇宙に、青い惑星、地球が、
罅をいれて割れる様が、クレヨン調で描かれていた。

と、まあ、ここはスペインの家である。

ロマーノはいつも通り、部屋の整頓としてスペインの部屋を掘り返していたが、
イタリアは意味もなく、ここに来ていた。

ロマーノはイタリアから本をひったくると、パラパラとページを捲り始めた。

そこで、気になるページを見つけたのか、その場所をまじまじと見た。

挿絵には、黄色い髪の毛で、どこかの人形みたいなものが、大きく描かれていた。

というか、顔がアップで映されたようなものだ。

背景が真っ黒なのに、その人形の肌も黒いのである。

全体的に真っ黒なページに、白い文字でこう綴られていた。

人及び国は傲慢である

未知なるものに目を奪われる

幸せを永遠に求める

ある人形はこう告げた

そんな輩はわたくしが

茨で包んで育みましよう

育った花は私のもの

私だけのお人形

それを聞いたある国は

栄えていたのに争いで

争いで消滅した

「なんだこれ……」

「^{いさか}争いで？それって、戦争かな？」
「しらねえけど……」

巻きつく^{つた}薦は一度きり
犇^{ひし}めく祭壇
悲劇に憑りつかれ
何時をも漂う
歩いて歩いて
迷うに値し
友を傷つけ
いつまでこの世を彷徨うか

「こんなことばっか書いてあるのか？」
「ヴェー、スペイン兄ちゃん、変な趣味ー」
と、そこで、スペインがタルトを持って帰ってきた。
「ロマーノ、イタちゃん！タルトやで！ベルギーが作ってくれたん
や」
「わあい！！ベルギー大好きー」
「ふん、休憩にするぞ、コノヤロー」
と、散らかった部屋のど真ん中で、食べ始めた二人。

あの本には、まだ続きがあった。
ただ、破られていた。
何処に行ったのかもわからない。

その本には闇がある。暗い暗い、闇が。

まだ、何も始まらない。

静寂が終わる。終わりが始まる

プロローグ2

あ、永遠が終わる。

黒い星、光った？

私の出番？

嬉しいな

壊せるな

楽しみだ

行こうかな

よし行こう

？

「ヴェ、なんだっけ」

突然イタリアが何かを思い出しそうな感じになった。

「黒い星、光る？んー、思い出せない……」

「星？知らないぞ？」

あれから、スペインはまた、農業をしに行った。

スペインの部屋には二人しかいない。

ちゃんと片付けえな、という、部屋の持ち主の話も聞かず、
まだまだ荒らすつもりのような。

「あ、そうだ、思い出したよ兄ちゃん」

「おう、言ってみろ」

「黒い星、流れ星に願い事をする、願いが叶うんだって！」

「え、まじかよ！でも、黒い星、って、見えねえんじゃねえ？」

「黒くても、光ってるからわかるんだって」

と、そういう話から、

「そうだ、明日、皆に言おうかな」

「わかった、広めるんだな」

と、主旨が変貌した。

で、それから、イタリアは、普通に帰宅した。

何もない。皆無。特別なことは何も、何もない。

なのに、イタリアは、眠れなかった。

わくわくして、ただの噂だった黒い星を、

皆に広めたい、そう言った気持ちでいっぱいだった。

少し、おかしくなったかのような。

何かに、憑りつかれたような。

それから、二時間はベッドの中で眠れずにいたが、
とうとう睡魔に勝てず、寝てしまった。

そして、終わりが近くなっていく。

？

明日？明日かあ

楽しみだなあ

緊張するなあ

楽しみだなあ

壊したいなあ

終わらせたいなあ

楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ
楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ
楽しみだ

楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ楽しみだ
楽しみだ楽しみだ楽しみだ
楽しみだ

みだ楽しみだなあ

日が昇る。

今夜が最後だ

今夜終わる

人形が、動く

？

「ヴェー、おはよう！」

元気よく起きたものの、まだ空が暗いままだ。
早く、起きたんだ、俺。
と、愉悦感に浸ってみる。

陽は、そろそろ昇る。

日本はもう起きてるかな。
ドイツは起きてるかな？
でも、意味はないのかな
いつ起きても、同じこと

あれ？

俺、いま、何を考えた

？

イタリアは勢いよく首を横に振った。
なんか俺おかしい？

おかしくない、俺は俺だし

でも、いまの、俺？

……まあ、いいかなあ

そして、ベッドから降りた自分の恰好が、軍服を着ていることに気付いた。

うわあ、俺、このまま寝てたの！？

「ヴ、ヴェー」

泣きそうな声で鳴いた。

あ、今日は世界会議だっけ。

何をすればいいっけ？

そうだ

ク
ロ
イ
ホ
シ

うん、楽しみ。

皆に言わなきゃ。

それから、ドイツ、日本に電話した。

「一緒に、会議行こうよ」

?

ユ
メ
モ
コ
ワ
ソ
ウ
セ
カ
イ
ト
イ
ッ
シ
ヨ
ニ
ア
ト
ニ
ナ
ニ
モ
ノ
コ
ラ
ナ
イ
ヨ
ウ
コ
ナ
ゴ
ナ
ニ
ク
ダ
イ
テ
シ
マ
オ
ウ

サ
ア、
セ
カ
イ
ガ
コ
ワ
レ
ル

「あ、日本ー」

「い、イタリア君!!」

世界会議の時間の一時間前。

待ち合わせの時間の三十分程の時間。

とてもはやい、そんな時間に。

イタリアがやってきた。

「イタリア君!!と、とても早いですよ、どうしたんですか……」

「えー、なんか、早く来ちゃったから」

赤飯、もう少し炊いておけばよかったです、と、
日本は呟いた。

それから十分後にドイツが来た。

「な、な、何故だイタリア!!」

「え、何でって言われても……」

やはりドイツも感心して歓心したようだった。

俺、やっぱりこの二人が大好きだ。

イタリアは改めて思った。

この二人は壊したくない？

え？

ふと無意識に意識して考えたその言葉。
二人を壊す……、どういう意味だろう。
というか、俺は一体？

あれ、頭が痛い。

イタイ？

「え？」

「どうした」

「イタリア君？」

二人は何かを話していたようだったが、わからなかった。

「何か言ってた？」

「ああ、今年の事業企業のことを」

「イタイって、言った？」

「いいえ、痛い、とは……？」

俺にもわからない。

頭が痛いってだけで……

イタイ？コワレル？

「な、なに!？」

「どうした、イタリア!」

「少しおかしいですよ、イタリア君。如何なさいました？」

「だ、だいじょう

コワスコワスコワスコワスコワスコワス

」

イタリアの声で、ある単語が繰り返された。

「な、い、イタリア!?!?!?」

「どうしたんですか、イタリア君?!」

「……なにも、ないよ」

「何もないわけないだろう!？」

「大丈夫、声が聞こえるだけ、違う」

「声……?」

「違う、頭が痛いだけ」

「そんな風には

」

「いいから、会議場、いこつ」

イタリアは、無理をしているように笑った。

会議場に着いた三人。

ドイツと日本は心配そうなめをイタリアに向けている。

向けられている当人は、少し白い顔をしながら笑って、既に集まっている国達に、

「おはよう、皆元気？」

と挨拶をした。

「お、イタリアー。お前はやいなあ、今日」

と、メイドさんと話していた男が、こちらを向いて言った。
フランスである。

「うん、今日は早く起きたんだ」

と、イタリアはその男のもとに駆け寄った。

残された枢軸の二人は、首を横に振って自分たちの席に座った。

「どうしたあるか、なんか暗いあるよ、日本」

「中国さん……」

後ろからウーロン茶（hot）を差し出されて、後ろを見た。

メイドさんに止められている中国がいた。

「中国さん、私がやりますよ、お茶を淹れることくらい！」

「もうやってしまったある。きにすんなある」

「……」

何をしたいんだ、とか思ってしまった日本だったが、頭をかぶりふった。
優しさでやったんだろう、とも思えた。

その一方で、ドイツは謎のマニュアルを読んでいた。

題名は、《うわごとと魔術》

おそらくイタリアのさっきのことで調べていたのだろう。
しかし、似たようなことが書かれていない。

頭を悩ませた。

会議場に居るのは、

紅茶を飲むイギリス、

ナンパをしているフランス、

リトアニアとラトビアをニコニコとみているロシア、

メイドと口論している中国、

オーストリアとハンガリー、

中立兄妹、

スペインとベルギー、オランダ、

エストニアともちも次いで、

北欧はアイスランド、ノルウェーの兄弟を抜いた三人、

枢軸の三人が、

それぞれ自分たちのことをしていた。

そこに、バアン、と大きな音を立ててドアを開ける人物がいた。

「よし、今から世界会議を始めるぞ！！　ってあれ？　なんか地味に少くないかい？」

眼鏡を押し上げてまじまじと、集まっている国の顔を眺めた。

「まだ時間じゃねえぞ。しっかり時計見ろよ」

とイギリスが言った。

「ふうん。それにしてもイタリア、今日は早いね！」

「うん、頑張っただけだよ」

普通に答えた。

？

まだ、序の口だ。
まだ、全然、甘い。

苦しめよ。

そして、それから何人集まったのかというと。

ずらっと並ぶことになるのだが、

何故か台湾、香港、マカオ、ベトナム、韓国、
アイスランド、

ロシア、ベラルーシ

とまあ、半分も集まらなかった。
と思ったら、カナダもいた。

「寝てたら、クマ権三郎さんに引つかかれて……」

と、クマ次郎を抱えて、顔に爪傷を負って来た。

それから、集合時間が過ぎてしまったので、

「よし、もう待ってられないんだぞ！今から世界会議を始めるんだぞ！」

と、自称ヒーローが声を張り上げた。

「今回の議題は、最近の金融関係なんだぞ！TPPが……」
と始めたところで、

議会の内容はどうでもいいと思うので、
疑問にいくつか焦点を合わせてみよう

Q1 なんで国じゃないやつらが地味に居るの？

A1 台湾曰く「老師今日朝から腰悪くしちゃったよー、不安だよ」
「

香港曰く「なんか very flee だったつす。意味なんて無いです的な」

Q2 なんでアイス居るのにノル居ないの？

A2 アイス曰く「トロールで今手が離せないんだって」

Q3 ベラ居るのにウクは？

A3 本人曰く「今頑張って内職してるの、ごめんね、ロシアちゃん」

Q4 お餅連れてきてるエストって……

A4 本人曰く「最近この子たち喧嘩ばかりですから……」

という具合である。
みんな忙しいのだ。
そうこうしている間に会議も大荒れを見せる。

「まあたイギリスそんなこと言っちゃってさあ、お兄さんそろそろ

限界」

「ばーか、俺だって限界だからな、もうそろそろ、限界超えるんだぞー!」

「何張り合ってるんだい!? そんなことで張り合っても意味ないだろう!？」

空き缶、ボールペン、本、スコーンetc……と、いろんなものが会場を飛び交う。

「もう、いい加減にしないか!! いつも通り、発言を慎め! ブツ」

と、ドイツの一喝と説教が始まった。

そして、場が静まったとき、日本はイタリアを見た。

俯いているイタリアは、ブツブツと何かを言っていた。

次の瞬間。

イタリアはハッと顔を上げて、大声で言った。

目が、開いていた。奥に鈍い光を放つ、そんな目を開いて。

「黒い星、黒い星だよ、すべては、そこで始まって、そこで終わるんだ!」

辺りがざわつく。

「イタちゃん……?」

スペインは立ち上がった。

「聞いてて!!!」

イタリアは立った方を見て、声を張り上げた。

「今夜、その黒い星が現れる。そしたら、願い事をその星にするんだ!!!」

それは、前日、ロマーノと話したことだった。

「絶対願いはかなう。叶えてくれる、あの人が!!!」

そう言った彼は、いきなり立ち上がって、扉の方へよろよろと歩いて行った。

「ねえ、みんなも、一緒に

」

そこで、張り詰めた糸が切れたように、ぷつりと、イタリアは倒れこんでしまった。

倒れたイタリアは、自称ヒーローによって帰宅させられた。
もちろんドイツと日本もイタリアの家へ行った。

議会なんてもの放置な感じだった。

「というわけで、イギリスう、後は頼むぞ!!」

とかアメリカは言っていた。

そして、ヒーローも含めて四人が会議場を去ったとき、
イギリスはあたかも何もなかったかのように、続けた。

「なあ、気になってしょうがないんだが、黒い星ってなんなんだ？」
フランスが答えた。

「そんなの聞かれてもわかるわけないじゃん、知らないし、聞いた
ばっかだし」

氷「でも、今晚その星が出るって言ってたよね」

芬「予測、でしょうか？　でも、確信があったように聞こえますが」

西「よし、ロマーノ心配や、俺、帰るで!!」

蘭「さつさとけえれ」

白「ああ、兄ちゃん、そんなこと言っちゃあかんのに」

リト「でも気になるよね。ねえ、ポーランド」

波「願い事叶うんだったら、おれ、願い事するし!!」

英「セーシエルに聞いてみるか……」

ドイツが居なくなるとコメントだらけになる。
これは世界がとても元気という証拠だ。

奥「イタリアの様子が気になりますが」

洪「伊タちゃん、大丈夫かしら」

瑞「あ、あっこ……（あそこ）」

丁「どした？あ、プロイセンの肩に乗ってる鳥だがや」
氷「え、なんで」

丁「んー、わかんねえなあ」

芬「後でプロイセンさんに聞いてみましょうか」

・・・・・・・・・・・・・・・・

終わらないのでスルーで行こう。

会議の終わった後。

アメリカはそのまんま帰ってくることはなかった。

そのかわり。

大体の国に

呪いは伝わった。

呪いを実行するのは彼ら次第だ。

そして夜。

イタリアは目を覚ました。

まだ黒い星は出てこない。

そしてイタリアは外に出た。

横には、日本とドイツが立っている。

心配そうな目で。

イタリアの目には、光という光は灯っていなかった。

一章 行方不明と日常崩壊

それでも事は進むから

？

ロマーノが心配とか言つといて、スペインはしっかり最後まで世界会議に参加した。
かなりオランダは不機嫌そうだったが、ベルギーはそれを、一生懸命たしなめた。

世界会議後

「ロマーノ！大丈夫やったか！？」
スペインは、ばぁんと扉を開いて自宅に入る。
しかし、何の声も、鳥の声しか聞こえない。
もうすでに暗いし。

ロマーノ？

それこそ心配になった。

ちよつとした思い当たりがあつたので、ベランダに向かった。

おつた。

そこには、空を見ているロマーノが居た。

「大丈夫か、ロマーノ？」

その背中に声をかけてみたが、返事が来ない。

どうした？

そつと近づいてみると、ロマーノがゆっくり振り向く。
月明かりに照らされたロマーノの顔。
目には光が浮かんでいなかった。

「スぺ……イ……」

そこで、ロマーノは崩れ落ちるように倒れた。

「なッ、ロマーノっ!!??」

?

ねえ、あの方は願いをかなえてくれるんでしょう。

?

「ねえ、これで……いいのかなあ」

イタリアはベランダで呟いた。
黒い星が鈍い輝きを放ち瞬いていた。
そして一言。

「ドイツと、日本と、一緒に、ずっと、一緒に」

居たいなあ……

そこで、倒れこんでしまった。

ドイツがそれをしっかり支えた。

「イタリア君……」

？

ロマーノが倒れた時と、イタリアが倒れたとき
同じ時間だった。

？

日本の携帯に一本の電話。

はつきり言ってそれどころではない

アメリカからだった。

「はい、日本です」

【俺だ、アメリカだ！緊急なんだぞ！！】

「どうされたんですか……」

【カナダと連絡が取れないんだよ！！ 会って約束したのに……】
「え……？」

？

終わるからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0699z/>

【ヘタリア】追憶のヘタリア

2011年12月20日22時56分発行